論文の和文要旨	
論文題目	「フェルナンド・ペソーア研究ーポエジーと文学理論をめぐってー」
氏名	渡辺　一史

本論文は、20 世紀のポルトガル詩人、フェルナンド・ペソーア Fernando Pessoa(1888-1935)の思想、とりわけ、この詩人のポエジーの原初形態およびこの形態から派生した文学理論について検討することを目的とする。

この検討に際して主として取り扱われるのは、ペソーアの文学生活初期（おおよそ 1912 年から 1918 年）のポエジーおよび文学理論である。本論の検討がこの時期に傾注されるのは、この時期にペソーアのポエジーの原初形態およびこれを本源とする文学理論が思索されたという事由に拠る。

ペソーアは自身の文学生活においてさまざまなポエジーと文学理論を提出したが、本論において検討されるポエジーおよび文学理論は、この詩人のもっとも重要な思想のひとつをかたちづくり、と同時に、この詩人の全体的な思想を読み解くための重要な要素ともなっている。

第一部では、導入として、ペソーアが自身の文学生活初期に多大な影響を受けた 20 世紀初頭のポルトガルの文学運動〈サウドジズモ Saudosismo〉、この運動がドグマとしたポルトガルの情緒〈サウダーデ Saudade〉、そして同運動へ参加するまでのペソーアの履歴が確認される。

これらの確認を経て、第一章では、ポルトガルの文学世界に登場するに際してペソーアが書いた、あたらしいポルトガルのポエジーに関する三つの論稿「社会学的に考察されるあたらしいポルトガルのポエジー *A nova Poesia Portuguesa sociologicamente considerada*」(1912)、「再考するならば *Reincidindo*」(1912)、「あたらしいポルトガルのポエジー　その心理学的側面について *A nova Poesia Portuguesa no seu aspecto psicológico*」(1912)が分析され、この詩人のポエジーの原初形態が考察される。この考察においてあたらしいポルトガルのポエジーの成立過程とこのポエジーの詩学および美学が分析され、このあたらしいポルトガルのポエジーの本質、つまりペソーアのポエジーの原初形態が、精神と物体、あるいは実在と非実在の均衡した溶解（状態）であることがあきらかになる。そしてこの本質に係る詩的実践である、「黄昏の痕跡 *Impressões de crepúsculo*」(1913)と題されるひとつの詩を構成する二編の詩「ああぼくの村の鐘 *Ó sino da minha aldeia*」(1913)および「沼地 *Paùis*」(1913)が具体的に検証されることによ

って、あたらしいポルトガルのポエジーの詩におけるあり様とあり方が分析される。

第二章では、ペソーアの哲学理論、〈汎神論的超越論 transcendentalismo panteísta〉が分析される。「あたらしいポルトガルのポエジー」論の第三論稿「あたらしいポルトガルのポエジー　その心理学的側面について」において論じられたこの哲学理論の分析のなかでペソーアは、精神と物体の実在性が抱える問題を根本命題として問い、この問題にたいする解として、「精神（霊性）の物体（物象）化」および「物体（物象）の精神（霊）化」、つまり精神と物体の実在的かつ非実在的な顕現という非両立状態を両立させるあり様とあり方を呈示した。同章ではこの哲学理論の分析を介して、あたらしいポルトガルのポエジーが哲学的にどのように補完されたのかが検証される。

他方、ペソーアはつねにおのれの詩学および哲学と神（宗教、信仰）の思索を切り離すことのなかった詩人であった。そしてそれはあたらしいポルトガルのポエジーの文脈においてもかわることはなかった。実際、ペソーアはあたらしいポルトガルのポエジーの思索と平行して神（宗教、信仰）を思索しており、この神（宗教、信仰）の思索は、あたらしいポルトガルのポエジー論の思索と多くが一致している。具体的に言えば、ペソーアはあたらしいポルトガルのポエジーの思索において実在性の実在的かつ非実在的顕現という矛盾を許容するポエジーを追究し、その事象総体として、精神と物体の実在的かつ非実在的な顕現という非両立状態を両立させる体系を理論化したが、かれは神（宗教、信仰）の思索にもこの思考をあてはめる。第三章では「合理（理性）的な信仰告白（信仰行為）」というペソーアの言葉に集約されるような神（宗教、信仰）思索に焦点が当てられ、それが、ペソーアのポエジーの原初形態と一致していることが考察され、またその具体的な表現形態が詩「神-彼方（彼岸）*Além-Deus*」の読解を通して分析されることになる。

第二部は、第一部で検討されたペソーアのポエジーの原初形態がこの詩人の文学理論にどのように刻印されているのかが主な論件となる。

この論件の具体的な検討のまえに、導入として、ペソーアが文学運動サウドジズを脱退した経緯が、ポルトガル初のモダニズム雑誌『オルフェウ *Orpheu*』(1915)やペソーアの文学理論〈パウリズモ Paùlismo〉との関係で明確にされる。ただし、この考察によって、サウドジズモの思想と相容れず、『オルフェウ』に関与し、パウリズモを構築したペソーアの思想が、モダニズムに接触しながらも、つねにサウドジズモに着想を得たあたらしいポルトガルのポエジーの思索と結びついていることもあきらかにされる。

この導入を経てペソーアの文学理論の検討が開始される。第一章では、文学

理論〈交差主義 Interseccionismo〉とその詩的実践である詩「斜の雨 *Chuve Oblíqua*」(1914)が分析される。この分析において、交差主義の理論内実に加え、これがパウリズモの進展された文学理論であることが検証される。この検証により交差主義が、キュビスムや未来主義の要素を備えるとともに、あたらしいポルトガルのポエジーの要素をも備え成立していることがあきらかになる。

交差主義のつぎに検討されるのは、この理論の進展形態である〈感覚主義 Sensacionismo〉である。

この文学理論の検討に際して、まず、この理論の構成要素としてペソーアが挙げた「フランスの《象徴主義》」、「ポルトガルの超越論的汎神論」そして「未来主義、キュビスムそして他の類似の思考が誘発的な表現形態であるところの無意味かつ矛盾した事象の寄せ集め」という三つの「運動」についての分析がおこなわれる。この分析により感覚主義の構成要素は、ペソーアのそれまでの思考が、ある部分はそのままで、別の部分は改変されて、積み重ねられた理論であることが理解される。この改変は、とくに、あたらしいポルトガルのポエジーの本質であった実在性の実在的かつ非実在的顕現から実在性の非実在的顕現へとペソーアが自らの思考の重心を移動させたことによって発生するが、この改変の原因としてふたりのポルトガル象徴主義の詩人、アントニオ・ノブレ António Nobre(1867-1900) およびカミーロ・ペサーニャ Camilo Pessanha(1867-1926)のポエジーと詩作品が分析される。

感覚主義の構成要素を理解したのち、第二章では、「芸術において精神の幾何学的な諸要素のなかに実在性の分解を実現」することを目的とする感覚主義の呈する感覚様態が分析される。また、この感覚様態の分析と平行して、「すべてをあらゆる方途で感覚する」ことを追求する感覚主義が理論核とする「感覚 Sensação」によってつくりだされる、一次元、二次元、三次元的な感覚次元の分析もおこなわれる。そしてこの感覚様態と感覚次元は、詩「不合理な時刻 *Hora Absurda*」(1913)、「斜の雨」、「船乗り *Marinheiros*」(1913)の分析を介して具体的に検証される。

これらの考察により感覚主義の理論内実が分析されたのち、ペソーアが感覚主義との関連で呈示した「感覚の人格化」の問題が〈異名 heterónimo〉現象に結び付けられ分析される。この分析においては、ペソーアが感覚主義の文脈で異名をどのような意図をもって創造し、これをどのような使命を為す装置として規定したのか、また感覚主義者であり、「主要」と呼ばれる異名は、他の異名と比べてどのような特異性を有しているのかが検討される。

この検討を経て、アルヴァロ・デ・カンポス Álvaro de Campos およびアルベルト・カエイロ Alberto Caeiro というふたりの「主要な」異名の詩「海のオード *Ode marítima*」(1915 年頃)と「群れの番人 O *Guardador de rebanhos*」(1915)が分

析され、「主要な」異名がどのように「感覚すること」を詩的実践においておこなったのかが分析される。

第三章においては、「主要な」異名とペソーアが師弟関係によって秩序付けられており、この関係において、師カエイロとかれの弟子であるペソーアや他の異名がパガニズムという神学体系によって結ばれていることが論じられる。

同章ではまず、感覚主義の「美学的宗教」と呼んで差し支えないこの神学体系「パガニズム」が、一般にパガニズムと呼ばれ理解される神学体系とは異なる、師カエイロの特異な感覚とポエジーを軸として成立していることがあきらかにされる。続いて、このカエイロの感覚とポエジーを弟子であるペソーアやカンポスたち異名がそれぞれの方法で解釈しながら詩化および理論化し、「ポルトガルのパガニズム」あるいは「ネオパガニズム」と呼ばれる神学体系をつくりだすことが闡明される。これらの考察ののち、このパガニズムを具体的に知るために、ペソーア名義の「高次のパガニズム *o Paganismo Superior*」（1915 年頃）およびカエイロの「哲学的後継者」である異名アントニオ・モーラ名義の『神々の帰還 *O Regresso dos Deuses*』（1917 年頃）と題される論考に呈示されたパガニズム思考が分析されることとなる。

本論が焦点をあてて具体的に論考するペソーアのポエジーおよび文学理論が理解されることにより、この詩人のポエジーおよび文学理論の一旦があきらかになり、と同時に、これがペソーアの他の芸術的思考を論考するためのひとつの指針となると思われる。